

F-28 生活構造からみる生活形式について —— 生の表現としての衣服(第一報)

郡山女子大生 経

○工藤澄子、田部井トキ

目的 生活の本質を理解する一端として、生の側面である体験と表現の研究例を古代のヒッタイトの遺跡にみられる衣服の形式にしぼり、空間的、時間的な観察を試みる。

方法 生を生から理解する解釈学の方法に立脚した。生の表現形式として客観化された時間的、文化的集積である衣服の形式の歴史から生活の原点を探ってみる。参考文献(解釈学、世界史、服装史、ヒッタイト学)等を渉猟し、東西文明の原流といわれるトルコのボアズ・キョイ(アンカラの附近ハットウ・ジャシュ)のヒッタイトの遺跡を尋ねて資料の蒐集をした。

結果 古代(B・C 1700年～1450年頃)のヒッタイト帝国の衣服の形式を決定する要因として、1.地理的風土性、2.国の占めている位置がもたらす多様な民族と物資の活発な交流が考えられた。1は住民の生活空間を大きく規制し、食生活や衣生活の材料と空間構成、形式の傾向を決定する。また沙漠や海を控えた民族の価値規準や信仰を生み出し、精神と物資との相互浸潤は時間を超越した衣服形式を生み出した。2、この地方は三方をエーゲ海、地中海、黒海に囲まれ、北東はアジア、南はアラビア、アフリカ、西はヨーロッパの三大陸に接して東西南北の民族文化交流の十字路であり、神話、宗教、文化等に相互に浸潤作用をもたらした衣服の表現形式が多様である。今までの服装史にみればスボン形式はペルシアで用いられるとあるが、既にヒッタイトやエジプト・クレタ等の遺物に認められる。現在も踏襲されていて、蓋し「環境順応の法則支配」の必然の帰結といえよう。